

事例 2

「臨江之麩^び」を基にした創作活動を通して、人間、社会に対する思想を的確にとらえる

1 育成を目指す言語能力

本単元は、古典の寓話に描かれた人間像や思想を、表現に即して的確に読み取るという言語能力を育成するために計画したものである。新学習指導要領の「古典B」の指導事項「ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」を指導の中心に取り上げる。そして、「書き手の主張や文章の内容をとらえ、音読を取り入れながら読み味わっている。」「寓話の内容を押さえながら、書き手が述べようとしていることを読み取っている。」という評価規準を中心にして評価する。また、「国語総合」の「ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること」を参考にして設定した、「寓話の内容と自分の生活や現代の状況との共通点を考え、自分の言葉で物語を創作する」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

この実践は、訓詁注釈に偏りがちな古典の指導を改善し、一層古典に親しむ態度を身に付けることができるように、生徒が学習に主体的に取り組める創作活動を工夫した事例である。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 名家の文章「臨江之麩^び」(柳宗元)

(2) 単元の目標

- ①漢文の寓話を読んで、表現の意図や特色をとらえようとし、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会などに対して自分なりの考えをもとめようとする。(関心・意欲・態度)
- ②書き手の主張や文章の内容をとらえ、音読を取り入れながら読み味わう。(読む能力)
- ③寓話の内容を押さえながら、書き手が述べようとしていることを読み取る。(読む能力)
- ④漢文の訓詁に必要な返り点、送りがな、句読点などに関するきまりについて理解する。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
①漢文の寓話を読んで、表現の意図や特色をとらえようとし、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会などに対して自分なりの考えをもとめようとしている。	①書き手の主張や文章の内容をとらえ、音読を取り入れながら読み味わっている。 ②寓話の内容を押さえながら、書き手が述べようとしていることを読み取っている。	①漢文の訓詁に必要な返り点、送りがな、句読点などに関するきまりについて理解している。

(4) 指導と評価の計画(5時間)

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	作品の音読 (1)本文について、範読を聞く、斉読する、二人組になって一文ずつ交互に読み合う、指名により順番に読む。	○難読語句について説明する。	読む能力① 言語文化と国語の特質① (指名読みで確認)
2 5 3	本文の内容理解 (1)書き下し文を書く。 (2)口語訳をする。	○脚注を参考にさせる。	読む能力① 言語文化と国語の特質① (ノートへの記入状況の確認)
4	物語の作成(前半) (1)あらすじを確認する。 資料2 (一) (2)登場人物(動物)の実例を考えてみる。 資料2 (二) (3)あらすじと実例を踏まえて自由に連想し、物語の状況を設定する。物語の素描を作成する。 資料2 (三)	○復習のため、教科書、ノートを参照させる。 ○必要に応じて、「国家」などの例を挙げて示唆する。 ○机間指導をして、筆が進まない生徒に対しては助言を与えたり周囲の生徒と相談させたりする。	読む能力① (ワークシート 資料2 への記述の確認) 読む能力② (ワークシート 資料2 への記述の確認)
5	物語の作成(後半) (1)前時の活動を元に物語を清書する。 資料3 (2)作品を発表し、他者の発想に対する「気付き」を体験する。	○生徒の書いたものを教師が数編選び、読み上げる。	読む能力② (ワークシート 資料3 への記述の確認)

※「関心・意欲・態度」は単元全体を通して評価する。

3 評価の例

「寓話の内容と自分の生活や現代の状況との共通点を考え、自分の言葉で物語を創作する」という言語活動において、大半の生徒があらすじを把握し、身の回りの出来事と比較して考え、現代社会における身近な実例を挙げる事ができた。

資料2のワークシートで、寓話にあてはまるような人として、生徒が挙げた例

	生徒A	生徒B	生徒C
臨江之人	人間	夫	校長
麩	ハムスター	嫁	教師
犬	猫	姑	生徒

寓話を基にした新たな人物設定で「物語」を創作するという言語活動において、読み取った原典の内容を、原典とは異なる設定で書き改めることを通して内容理解の深化を図った。この学習

活動で、「十分満足できる」と判断される作品の例が資料4である。

4 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

ア 古典に親しませるための指導の改善

この実践は、「漢文の寓話を読んで、表現の意図や特色をとらえようとしたり、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会などに対して自分なりの考えをもとうとしたりする態度を身に付ける」ためのものである。古典をただ単に口語訳して解釈するだけではなく、そこに込められた英知や処世訓などを自分自身のものとして体得し、生きた知恵とすることを目指している。そのために、物語を創作するという言語活動を取り入れた。その結果、資料4のような秀作が多数見られた。

イ 言語活動によって、生徒が能動的に学習に取り組む状況を設定できたこと

古典の授業では、生徒はもっぱら教科書を読み、教師の説明を聞き、板書を写すことに終始することが多い。本事例では、書くことに関する言語活動によって、生徒が能動的に学習に取り組む状況を設定できた。

ウ 多面的な評価

古典の文章を解釈することや言語事項を覚えることが苦手な場合でも、想像して書く活動には意欲的な姿勢を見せる生徒が多数見られた。その点で、これまでの指導では見えてこなかった、生徒の新たな面を評価することができた。指導の工夫次第で、古典への関心を高めることや、多面的な評価ができる。

(2) 課題

訓詁注釈に偏りがちな古典の指導を改める必要性は、これまでも指摘されてきた。本事例は、そうした状況を改善するための試みでもあり、実践の結果、次のような課題が残った。今後の指導の改善に生かしたい。

ア 年間指導計画の見直し

十分に時間を確保して創作活動等に取り組ませるには、数時間を要する。そのためには、年間指導計画を見直して、単元の構成や様々な言語活動の位置付けを再構成する必要がある。

イ 発問やワークシートの工夫

受け身の学習姿勢になりがちな生徒に対して、豊かな発想を引き出し、主体的に学習活動に取り組ませることのできる、発問やワークシートの工夫が必要である。

ウ 学習形態の工夫

生徒同士の学び合いを促すために、普段の指導や創作活動にもグループ活動を取り入れるなど、指導の在り方を工夫する必要がある。

使用教科書

・『改訂版高等学校標準古典』第一学習社

臨江之麋

柳宗元

① 臨江之人、^{カリシテ} 畋得^②麋、^{ゲイラ} 畜^{ヤシハントス}之。入^{イルニ}門、群犬垂^{タラシ}涎、^{ヨタレラ} 揚^{ゲテ}尾皆來。其人怒^{リテ}、^③怛^{オソレシム}之。自是日抱^{キテ}就^④犬、^⑤習示^{シテ}之、^⑥使勿動、^⑦稍使与之戲。積久、犬皆如^シ人意。麋^⑧麋稍大、忘^レ己之麋也、以^{ツテ}為^シ犬良我友、^⑨抵触^⑩偃^⑪仆、益狎。犬畏^レ主人、^⑫与之俯仰甚善。然時啖^⑬其舌。三年、麋出^⑭門外、見^⑮外犬在^⑯道甚衆、走^⑰欲^⑱与^⑲為^⑳戲。外犬見^㉑而喜、且怒、共殺^㉒食^㉓之。狼藉^㉔道上。麋至^㉕死、不^㉖悟^㉗。

(柳先生文集)

- ① 臨江 今の重慶市忠県。
- ② 麋麋 「麋」は、トナカイの一種で、「なれしか」という大鹿。「麋」は鹿の子。
- ③ 怛 おどして恐れさす。
- ④ 就犬 犬に近づける。
- ⑤ 習示 何度も何度も見せること。
- ⑥ 稍 少しずつ。
- ⑦ 積久 しばらくたつて。
- ⑧ 抵触偃仆 体に触れたり転げ回ったり。
- ⑨ 狎 鹿の子が犬になれ親しむ。
- ⑩ 与之俯仰 鹿の子に調子を合わせる。
- ⑪ 啖其舌 舌なめずりする。
- ⑫ 狼藉 狼が草を敷いて寝た後の乱雑なさま。ここは、食べかすが散乱している様子。

(書き下し文)

臨江の人、畋りして麋麋を得、之を畜はんとす。門に入るに、群犬涎を垂らし、尾を揚げて皆來たる。其の人怒りて之を怛れしむ。是れより日に抱きて犬に就き、之に習示して、動くこと勿からしめ、稍く之と戯れしむ。積むこと久しくして、犬皆人の意のごとし。

麋麋稍く大にして、己の麋なることを忘れ、以つて犬は良に我が友なりと為し、抵触偃仆して、益狎る。犬は主人を畏れ、之と俯仰して甚だ善し。然れども時に其の舌を啖ふ。

三年にして、麋門外に出で、外犬の道に在ること甚だ衆きを見、走りて与に戯れを為さんと欲す。外犬見て喜び且つ怒り、共に殺して之を食らひ道上に狼藉たり。麋は死に至るまで悟らず。

* 「柳先生文集」 中唐の詩人・文章家である柳宗元（七七三〜八一九）の詩文を集めたもの。

臨江之麩

一 あらすじをまとめよう。

- ① 臨江の人が [] を捕まえた。
- ② それを連れて帰ると犬どもが [] とした。
- ③ その人は [] を何度も [] した。
- ④ 犬どもは [] になった。
- ⑤ [] は自分と [] が友だちであると思った。
- ⑥ [] は門の外に逃げ出した。そこに野犬の群れがいた。
- ⑦ [] は一緒に遊ぼうとして駆け寄ると、野犬にたちまち喰い殺された。

二 この寓話にあてはまるような人が、現実にはいないだろうか。自由に考えよう。

- 麩 ↓
- 臨江之人 ↓
- 群犬 ↓
- 外犬 ↓

三 二の人物設定で、自分なりの物語を創作しよう。

(1) 右のマルの中にあることばで思いついたことを、自由に書き出してみよう。

いつ

どこで

だれが
なにが

なにを

どうして

どうなった

(2) (1)で書き出したことばをつなげて、物語を創作しよう。

題名 1

【例、「ああ、かんちがい」】

(生徒の作品例)

信じるべきモノ

ある日、某地方を統治していた將軍が病気で亡くなった。その將軍は遺言を残しており、彼の息子が後を継いだ。

しかし、その息子というのがとんだうつけで、地方を統制する方法など全く知らなかった。家臣は言った。

「お父上の仕事ぶりは、我々が見てきました故、我々があなた様に助言をしてさしあげますよ。」

息子は大変喜び、父の人望に感謝さえした。けれどもこの家臣達は、彼の父の仕事は一切続けず、己の思うがままに彼を操った。当の彼は、ただただ喜び、家臣を信用しきっていた。数ヶ月経ったある日の事である。城の外へ出る事を禁じられていた彼は、庭園を歩き回っていた。すると何処からだろうか、怒った様な声が聞こえ、不安になり、急いで部屋に戻った。

「如何致しました？ そんなに息を切らして。」

「今そこで、とある噂を聞いたのだ。わしは、まつりごと政を誤ってはおらんよな？」
家臣は大層びっくりし、しかし、冷静に言った。

「何を仰るのです。貴方の政は完璧ですよ。もっと自信を持って下さい。」
彼はその言葉を信じ、胸を撫で下ろした。彼は自分や噂よりも、家臣を信じたのだ。

翌日、彼はこっそりと、城を抜け出した。完璧とまで言うのなら、民に崇められ褒められたいという欲が出たのだ。初めて会った男に、彼はおもむろに声をかけた。

「やあやあ、我はこの地の統主、かささぎいくとも笠鷲幾伴であるぞ。ぬし、わしに会えた事を光榮に思うが良い。さあ我を——」

「笠鷲幾伴だど!? 皆、我らの敵が来たぞ！」
話が終わらないうちに男が叫び、人々が集まった。敵とは一体誰の事だったのか。何故民は農具等を向けるのか。彼は答えを聞けぬまま、深い深い闇へと、痛みと共に堕ちて逝くのだ。た……。

もし彼が自分を信じていれば、自分で統治しようと思えなければ。事の全てを聞いた彼の母は、ひたすら嘆き、涙を涸らし、その命さえも枯らしてしまったという。

誰が一番悪いの？ 家臣？ お父さん？ 息子？ 民？ お母さん？